

「子どもたちに科学の楽しさを伝えることはできないか?」。これは私が教育者として日々考えているテーマです。

そして、「子どもが子どもに教えたらもっと楽しくなるのでは」という結論に至り、当時11歳の娘と8歳の息子による「子どもが子どもに行うサイエンスショー」に挑戦することになりました。

実験をショー形式で楽しく見せるサイエンスショーには、話術と実験を成功させる力が必要です。さらに、お客さんのほとんどが小

⑨ 芸は見て盗む



大阪成蹊大准教授 福岡亮治

学生を中心とした子どもなので盛り上げつつも、聞かせる環境をつくるといった学校の先生のような技術も必要となります。「それを娘と息子ができるのか!」



しかし、娘と息子はその不安を吹き飛ばすかのように実験で盛り上がり、ざわつく会場を鎮めつつも、小学生がつぶやく意見をしつ

かり拾いながらショーを進めていきます。その後も実験がうまくいかないなどのトラブルがありましたが、アドリブで対応し、200人という大ステージを最後までやり切りました。



舞台後、私は「想定外の出来事とその場その場で対応するアドリブ力がすごいなあ」と進行の中心であった娘を褒めました。娘からは意外な返答が。「アドリブ? そんな事やってないよ」娘はさらにこう続けます。

「私がお父さんのステージを何十回何百回も見てきた。今日起こった出来事は特別なことではなく、私が見てきた中であつたことと同じような内容やった。だから、『お父さんはどうしてたかな?』と考へて。その行動をしただけで、アドリブとは違う」

## アドリブの天才? 娘に学んだ神髄

も欠かさず見ていました。1日複数回あるステージでも全ての回を見ていました。「飽きないのかな」程度に捉えていましたが、娘はお客さんの反応やそれに対応する私の動きを分析しながら見ていたようです。その視点で数百回も見ていたのだから想定外のことも起こっても、対応ができるようになるというのは、妙に納得のいく話でした。



振り返れば、私が吉本新喜劇に入団した時に「先輩の芸を見て学

びなさい」という言葉と共に、な

んばランド花月をフリーパスで観覧できる名札をいただいた。当時の私は「今週の新喜劇はどんな内容かな」「同期の芸人はどれだけ活躍しているか」という程度の解釈で観覧し、同じ内容の新喜劇を2回以上見ることはありませんでした。今思えば情けない話で、真の学びが分ならず、学びのチャンス逃してしまいました。しかし、娘は私が至らなかつた学びをし、見事に実践していたのです。

「経験を積み上げ、それを実践するのがアドリブ力」。お笑い芸人時代に学ぶことができなかった話術の極意を、娘から学びました。